

I はじめに

1 研究経過

昭和54年度の養護学校義務制以降、自閉的傾向児の増加は全国の障害児教育の場において、共通に見られる現象であった。本校ではその対応として、個別学習、集団学習の両面から実践的な研究が進められてきた。また、障害の重度、多様化にともなって、教育課程も見直されてきた。最近では、昭和61年度、62年度にわたり再編成が行われた。

その教育課程の編成とともに、教育目標もそれまでの「社会適応」から「自己実現」へと、大きく変わったといえる。そこで、昭和63年度より従来の小中高別に取り組む研究活動から、教師一人ひとりの問題意識に基づいて出発した少人数グループによる課題別研究に重点をおいて進めてきた。

今年で3年目を迎えるにあたり、課題別研究の基本的な考え方から多くの実践をつみ、徐々に定着し、各学部へと研究内容が浸透していったのである。

2 研究概要

(1) 研究主題

「発達と障害に応じた指導」のテーマを掲げ3年目になる。これは、本校の教育目標、「心身の発達の遅れや障害のある児童・生徒に対して、その実態に即した指導を行うことにより、一人ひとりの全面的な発達をうながし、その子らしく精一杯生きる力を育てることをめざす」に迫ろうということから、考え出されたテーマである。障害の重度・多様化の中で、比較的小規模校である本校でも能力差、発達のアンバランスが大きくなってきている。こういった実態を直視しながらも、子ども一人ひとりの能力を最大限に伸ばすということから、6つの研究グループを設け、いろいろな角度から子ども達にアプローチすることにした。

(2) 研究グループの取り組み

これらの研究グループは、本校の教師集団が子どもを中心におき、それまで独自に行ってきた学習会や教師一人ひとりの問題意識に基づいてできあがったものである。また、これは基本的に一年単位で研究に取り組むことになっており、毎年度グループの編成が見直され研究が進められてきた。

それでは、この6つの研究グループがどうしてできたか、その必要性や意義、また、3年間のあゆみなどを簡単に述べて概要としたい。

① 「わかる」授業を考える

このグループの目的は、授業の内容について見直し、子供の感性を揺り動かすことを中心とした授業を考えることにある。つまり、授業の中で、子供自ら「学びたい」「知りたい」という要求を引き出すような感動や共感ができる体験の中で、「わかる」学習を進め

ていくことが大切だと考えたのである。

本年度については、子供の理解の道筋を知るために、子供と教具との関わる姿を細かく観察していくことに重点を置いている。

そのため小、中、高等部と、同じ教具「算数パズル」を使い、年齢、能力差にとらわれず、子供一人一人に焦点を当てて、色や形、初歩の数量関係をどのように把握していくのかを探ってきた。子供が一人で試行錯誤したり、友達とのやりとりの中からわかっていったことなど、その子なりのわかり方を教師自身が把握しなければならないと感じている。

② からだづくりを考える

人間が健康的に毎日を過ごすことは憲法にも謳われていることである。その「健康な体」をどのようにして作り、どう維持するかということは大きな問題である。本研究グループでは、その第一の方法として「運動」を取り上げ、「運動できる体づくり」に取り組んできた。1年目は、子どもたちが夢中になれる遊びや活動を与えることで、無意識のうちにできる体づくりをめざした。2年目は、本校で以前からしているリトミックを見直して、より子どもに合った動きで活動させるようにした。またランポリンを活用することで平衡感覚に問題を持つ子、自分から積極的に体を動かそうとしない子の指導も試みた。

今年度は今までの無意識での動きから意識的に動かしての体づくりに重点を置き、養護・訓練の時間を中心に個々の問題点に合わせた指導を考え、そのための補助教具を作成した。また誰でも手軽に出来るようなストレッチ体操を考え、テープを作成した。

③ コミュニケーションを考える

良きコミュニケーション（相互作用）の成立や発展は、ことばのみならずすべての学習の基礎である。しかし、現実には子どもが何を言いたいのか大人に伝わらない。また、大人の伝えたいことが、子どもにうまく伝わらない状況が多い。このような相互の障害の状態を少しでも改善していくため、これまで探ってきた。

1年目は、インリアルの理論を学びながら、授業中や普段の生活の中に生かした。

2年目は、指導場面をVTRに収め、グループ内でコミュニケーション分析を行い、大人の子どもに接する姿勢などを振り返った。

今年度は、大人側の見直しだけでなく、子どもの問題点を明らかにし、指導目標の設定や手だてを考えて取り組んできた。

④ パソコンについて考える。

この教育の中でのパソコンの位置づけを探ることを主な目標として取り組んだ。パソコンを学習を進める上での一道具として捉え、パソコンを使用することで初めて体験出来たり可能なことを探るという観点に立って考えようとした。

そのようにして研究を進めてきた中で確認し合ったことは、第一にはハード面に考慮することで、子ども自身で出来るという部分を大切にすること。第二にはソフトウェアは単機

能のもので充分である。第三にはパソコンを親しみやすいキャラクターとして位置づけるということであった。更に、今後は集団の場でパソコンを活用する方向を目指したい。

⑤ 性指導について考える

性の指導を実際にどうすすめていくかということになると多くの困難をともなうことが多い。初年度の頃は性は生、生きることの教育、人間教育であることといった理念的なものが先行するあまり学習指導にも気負いがみられた。2年、3年と継続しておこなうにつれ子どもの表情やつぶやきを大切にしたものとなり、教材、教具にも工夫がなされ実態に即したものとなってきている。また、こうした取り組みは研究グループにとどまらず、まわりにも広まりを見せ、従来からの指導についても「性教育」といった視点からとらえるようになってきている。

今年度は性の自立にむけての取り組みとして、恥じらいを意識したトイレマナーの指導もおこなってきた。また、家庭との協力という点でも父母との学習会、懇談会も充実したものとなり深まりがみられた。

⑥ 読み聞かせについて考える

子ども達はみな優しく、素直な心、明るい心を持っている。その心をより豊かにするためにも絵本の読み聞かせという手だてがあるのではなかろうかと考えた。

そこで、次の2点について研究実践に取り組んできた。1つは各クラス(グループ)での読み聞かせ、もう1つは、全校生徒を対象とした「絵本の日」での読み聞かせである。この研究グループでは他とは違い、2年間の経過を述べたい。

まず1年目は、試行錯誤の状態、まず、私たち教師が読み聞かせに慣れることから始まった。実践のつどグループ内で反省会がもたれ技術の向上をめざし、また、絵本を選ぶ観点なども話し合われてきた。それにともなって絵本の充実もなされてきた。

2年目は、読む事にも少しづつ慣れ、子どもたちの理解しやすい絵本や、興味、関心のある絵本についても話されてきた。また、少しでも、絵本の内容(登場人物の気持ち、情景等)をわからせ、感動をゆさぶるために、いろいろな手だてをとった。

(今井康弘)